PDF Complete
Your complimentary use period has ended. Thank you for using PDF Complete.
Click Here to upgrade to Unlimited Pages and Expanded Features

「人の踏み入らぬ道に花あり」　西窪武（クローバーリーフ社長）

高校卒業後一年間米国での農業実習を経験し、家業の酪農に従事していた私が、家畜用の乾燥牧草をつくるビジネスを始めたのは昭和五十七年、三十三歳の時でした。当時、コンバインが全国に普及し、それまで粗飼料だった稲ワラは断裁され、田に返されていました。このままでは家畜用の稲ワラがなくなる。それならいっそ自分で乾草をつくって酪農家に販売しようと思ったのがきっかけです。

私と妻の二人だけのスタートでした。牧草ビジネスは前例のない試みでした。参考になる勉強会も書物もありません。毎日二人で話し合いを重ね、最初は一般家畜用のイタリアンライグラスの栽培に取り組みました。しかし、夏場に刈り取り、乾草にして販売する当初の計画は、ことごとく失敗しました。農場のある京都南部は湿気が多く、良質の乾草ができないのです。酪農家には相手にされず、取り引きが決まっても「乾草が湿っている」と買い叩かれる有り様でした。加えて円高による安い海外飼料の輸入が追い打ちをかけました。

家計は、子供のミルク代もないほど火の車で、妻の婚約指輪まで売り払って糊口をしのぐ毎日が続きました。真剣に転職も考えました。しかし「夢を持って始めた飼料作物を成功させたい」という思いは捨てることができず、歯を食いしばって仕事を続けていたのです。

京都市動物園に草を納めていた先輩から「自分は高齢だから、君たちが代わりにやらないか」と声をかけられたのは、そういう時でした。飼料作物の需要は酪農と競馬業界以外に考えなかった私たちは「動物園」という言葉を聞いた時、「これだ！！」と飛びつきました。しかし、一縷の望みを託したこの話は結果的には立ち消えになってしまいます。市が過疎地対策のために減反田を利用して動物園用の飼料をつくることになったのです。金銭的にも精神的にもどん底にあって、これが最後の底力だったのでしょうか。市の飼料づくりの圃場を一度この目で見たいと足を運びました。そこは市の北部に位置し、話を聞けば真冬に雪が一メートル以上降り積もる地域でした。

動物園に飼料を納入するには、何よりも安定供給が求められます、だが、これでは冬場の飼料の収穫は困難です。一方、南部にある私たちの農場は冬場も青々と牧草が育っています。これは一つのチャンスでした。厳冬の二月、収穫した牧草を持参して京都市動物園に営業をかけたことがきっかけとなり、「冬場の三か月だけ」という条件付きの契約をいただいたのです。

これが動物園専門の生飼料ビジネスの第一歩でした。もし、ここで年間通して契約をいただいていたら、京都市専属の小さな飼料農家で終わっていたでし

PDF Complete
Your complimentary use period has ended. Thank you for using PDF Complete.
Click Here to upgrade to Unlimited Pages and Expanded Features

よう。三か月の仕事では生活できないと考えた時、「そうだ。動物園は京都だけではなく全国にたくさんあるんだ」と気づき、牧草持参で関西の動物園に売り込みに行きました。需要もあり、「西窪さん、なんでもっと早く来てくれなかったんだ」と思わぬ返事に驚かされるなど一気に取り引きが増えました。

二十七年経ったいま、近畿、東海を中心に自社配達をし、遠方は宅配システムを活用して北海道の旭山をはじめ全国十六か所の園と契約をいただくまでになったのです。飼料ビジネスを展開する中では多くの壁にぶつかり、苦しみました。その中で発見と独自のアイデアも生まれていきました。園の動物たちは自然界の動物とは違って自ら餌を選ぶことも、また喋ることもできません。その動物たちの気持ちになって年齢や体調、好みや出生地など個体に合わせたオーダーメイドの飼料づくりを心がけてきました。

いまでは三十種類の生飼料を生産し食べている動物は百種類にも及びます。当初から安心、安全に配慮した有機無農薬栽培で、油臭い牧草を食べさせたくないために刈り取りは鎌による手作業です。雨の日や雪の日など天候の厳しい時にも動物の喜ぶ顔を思い浮かべ、一日も休むことなく続けています。少しずつ条件の違う圃場を約十か所に四十ヘクタール確保し、一年を通して動物が喜んで食べてくれるフレッシュな牧草を安定供給できる生産体制をつくり上げてきました。「西窪さんの餌を与えるようになって動物の毛艶がよくなり、繁殖がうまくいくようになった」と園の担当者から嬉しい声が聞けるようにもなりました。競争相手がいない中で、園と契約を結ぶのは、生半可な覚悟ではできません。すべての動物の命に全責任を負うことになるからです。餌の供給が一日でも滞れば動物は死にます。

二十七年の間には、阪神・淡路大震災で道路が遮断されるなど様々なアクシデントに見舞われましたが、それでも三百六十五日、一日も休まずに納入を続けてきました。振り返ると、孤独な道のりでしたが、前例がなければつくればいいというのが私たちの考えでした。

ある時、「人の踏み入らぬ道に花あり」という言葉に出合い、自分たちの道はまさにこれだと二人でいたく感動したことがあります。道なき道を歩み、周囲から白眼視され、叩かれに叩かれながらも、動物たちを思う気持ちだけは捨てず、どこまでもその一念を貫き通しました。そして一昨年、日本でただ一つの仕事として認められ、農林水産大臣賞を受賞、各界から注目を浴びるまでになりました。事業を支えてくださった多くの方に感謝しながら、今後もさらに人間の心を癒やしてくれる動物園の動物たちの命を守り続ける役目を果たしていきたいと思います。